

キーワード：情報モラル、情報リテラシー、焦点化、共有化、視覚化、学校と地域との連携

## I 研究について

研究主題

# 小学校における情報リテラシーの育成 ～学校と地域の連携を通して～

情報リテラシー： 情報化社会において、正しく情報を読み解き、正しく情報を発信する力  
情報モラル： 情報機器や通信ネットワークを通じて、社会や他者と情報をやり取りするにあたり、危機を回避し責任ある行動ができるようになるために身に付けるべき基本的な態度

### 1 主題設定の理由

#### (1) 今日的な課題から

学習指導要領の改訂では、子どもたちの知識・理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育てていくために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。また、GIGAスクール構想に基づき1人1台のタブレット端末が配置された。それらを有効に活用して授業実践を行うことが求められており、本校でも教職員一人一人が研鑽に励み、新たなツールを効果的・効率的に取り入れ、指導に生かしていこうと努力している。

さらに、今年度は、次世代のためのメディアリテラシー育成事業の情報モラル研究校の指定を受け、実践研究を行うこととなった。そのため、児童の実態や保護者の思い等を把握するために「安心ネットづくり促進協議会」のILASテストを実施し、その結果に基づいて、より必要感のある情報リテラシーを育成するために努力している。

#### (2) 本校の教育目標から

本校では「自分で考え 力を合わせ 夢に向かって 最後まで」を教育目標として掲げている。そして、

- 自分の考えをもち正しく伝える子ども
- 他と協働する子ども
- 粘り強く努力を続ける子ども
- 「なりたい自分」を追究する子ども

を目指す児童の姿として取り組んでいる。

特に、「正しく伝える」ことや「他と協働する」ことに関しては、情報リテラシーの育成と深くかかわっており、教育目標を具現化する取組として重要であると考えている。

#### (3) 児童の実態から

本校は、全校児童数47名の小規模校であるため、他学年と協働することにも積極的であり、教職員からの指示だけでなく、上級生からの指示や提案を素直に受け入れ、熱心に

学習や行事等、様々な活動に取り組むことができる。

スマートフォンやゲーム機等、双方向で情報をやり取りすることに特化したメディアとのかかわりでも、ほとんどの子どもたちが大きな問題を起こしておらず、家庭で決めたルールを大きく破ることなく、安全に使用している。しかし、少数ではあるが、1日でゲームに費やす時間が5時間に及ぶなど、健康を害しかねない使い方をしている子どももおり、家庭と連携しながら個別に対応しているところである。

年度当初、実態把握のために行った「安心ネットづくり促進協議会」のILASテスト(小学生版)の結果から、21項目中10項目において、半数以上が「不正解」または「わからない」という結果が得られたことから、家庭内での利用時間のルールや家庭内での使い方のルールは守られていても、外部との情報のやり取りに関しては、まだまだ知識が足りないことが浮き彫りとなった。特に「ネットで誰かの悪口を書く」「アプリや音楽のダウンロード」「ゲーム機によるインターネット使用」「アプリのID」「写真の掲載」「クレジットカード利用」「ウイルス対策」については、正解が3割を切り、個人情報の保護に関する内容や、著作権・肖像権など、法的な知識に問題があると考えられる。これらの項目に関して正しい知識をもち、安全に情報をやり取りできるようにするためには、学校教育だけでなく、家庭や地域の方々にも同じ視点に立っていただき、一緒に学び考える必要があるのではないだろうか。

#### (4) 本校の子どもたちがおかれた環境から

##### ① コロナ禍における学び合いや交流の制限を踏まえて

2019年末からの世界的な新型コロナウイルスの感染拡大により、子どもたちの学びの環境は激変している。特に今年度に入ってから、withコロナの考え方が主流になりつつあり、新型コロナウイルスに感染したり、濃厚接触者になったりしたとしても、オンラインで授業に参加することが当たり前になってきた。

依然、ソーシャルディスタンスを取るために、個々の緊密なやり取りや、マスクを外しての会話は控えているため、相手の感情を表情から読み取ることができず、意思の疎通に支障があることは否めない。さらに、画面上での交流となると、ますます感情が伝わりづらくなるため、自分の考えをもつことはできても、それをどれだけ正しく伝えられるかは難しい環境が続いているといえる。

##### ② 複式学級が2学級ある今年度の学級編成を踏まえて

本校では、2018年度から複式学級を抱えた学級編成となり、授業形態にも大きな影響を及ぼしている。今年度は、2・3年の変則複式学級と5・6年が複式学級となり、特に2・3年においては、タブレットの活用能力に差があることで、授業において活用するための教職員の準備が大きな負担になっている。5・6年においては、タブレットを使用し始めてから2年目となり、MetaMoji ClassroomやiMovieなどの既存のアプリケーションを、自分の目的に合った方法で使用することができるようになってきたため、情報を外に発信したり、外部の情報を取り入れたりするための情報モラルについて深く学ぶ必要があると考える。

以上のことから、今年度は、保護者を含めた地域との連携をとおして、①日常モラルを育てる、②仕組みを理解させる、③日常モラルと仕組みを組み合わせ考えさせるという3つの視点をもとに、授業を構築し、児童の情報リテラシーを育成していきたい。

## 2 実施内容

- (1) 研究授業の実施（各学級1回 合計4回 うち2回は公開）
- (2) 指導案の作成
- (3) 親子を対象とした情報モラル講演会の実施
- (4) SNSノートの活用

## 3 研究内容

### 【手立て1】 焦点化

- 本時のねらいを明確にし、児童に授業内容の見通し（方法の見通し・結果の見通し）をもたせるための工夫
- 自分の考えをもたせるための工夫
- ねらいを達成するための「中心発問」の工夫
- 教材へのしかけや、時間配分の工夫

### 【手だて2】 共有化

- 言語活動の明確な位置付け
- 思考過程の共有
- ペア学習等の活用

### 【手立て3】 視覚化

- 言葉だけでなく、学習内容や学習教材の視覚的提示
- 見えないイメージや論理の「見える化」
- 教材、教具の工夫

## Ⅱ 研究の実際について

### 1 校内での実践

- (1) 全学年・教職員・保護者を対象とした情報モラル講演会（9月5日）

講師：医療創生大学 教授 中尾 剛 氏

演題：情報モラルについて考えよう～インターネットの危険から身を守るために



（中尾 剛 氏による講演）

- (2) 第5・6学年 保護者を含めた地域と連携した授業（11月10日）

講師：5年児童祖父（現役YouTuber） 高橋 忠市 氏

演題：もっと広く、未来に残せるものを作ろう

- 講演会後の児童アンケートより

- ・ ゲーム依存症チェックを見て、自分に当てはまるものがたくさんあったので、お母さんとしっかり話をしようと思いました。（6年男児）
- ・ 先生のお話を聞いてこわいなと思いました。インターネットは1度出してしまうと消すことができないからです。（2年男児）



(高橋 忠市 氏による講演)

- 5年男児の祖父で、現役YouTuberを招き、YouTubeを配信する際に気を付けていることを、①法令に照らして②倫理に照らして③技術面における注意点の3点からお話しいただいた。
- 授業後の児童の感想より
  - ・ 人やものには権利があり、それらが法律で守られていることが分かった。
  - ・ 自分たちが撮影している番組の映像が、白とびしたり黒つぶれしたりしないように、タブレットの設定を工夫したい。

## 2 校内授業研究会での実践等

(1) 第4学年 道徳科「自ら信じることにしたがって」(A(1)善悪の判断、自律、自由と責任)の実際(9月15日)

### 【手立て1】 焦点化

- 児童8名のアンケート結果を心のものさしに8色の丸印で表示したものを提示するところから授業が始まった。「どうして正しいと思ってもできないことがあるのだろうか。」「自分だけじゃないんだな。」「人によって印の場所が違うな。」などの発言が見られ、自分のことだけでなく友達心のものさしも一緒に見ることができたのは児童の問題意識を高める手立てとして効果的であったと考えられる。



### 【手立て2】 共有化

- 主人公が友達とインターネットで検索すると、先に進むためには個人情報を入力しなければならない場面について役割演技を行った。演者からは怖いと思いながらも友達からの圧力に負けてしまう気持ちを感じたことや、観客は無責任にもっと見たいと言ってしまうことなど、自分事として実感を持った本音が出された。



その後、役割を交代していろいろな立場を経験し、互いの気持ちを考えながら、多面的・多角的に話し合う様子が見られ、人間理解につながったのではないかと考えられる。

### 【手立て3】 視覚化

- 黒板の前に集まって心のものさしを使うことにより、視覚的に捉えながら、話し合いがスムーズに行われた。
- 振り返りの場面では、事前アンケートのときとの自分の心の変化を感じている様子が見られ、自己をじっくりと見つめる時間となった。
- 心のものさしの目盛は、児童が自分に問いかけたときに付けやすいのはいくつなのか、ツールとしてより効果的な活用の仕方を工夫する必要がある。

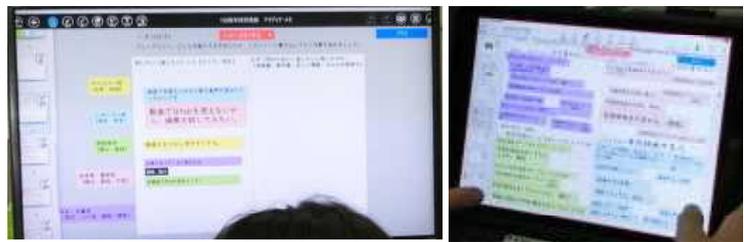
(2) 第5・6学年 総合的な学習の時間「平田の伝統～平田の歴史と自まんを発信せよ」  
の実際（11月16日）

【手立て1】 焦点化

- 生放送では伝えきれないたくさんの方々にも届けられる方法を考えることで、「何を」「誰に」「どんな方法で」「何のために」残すのかという点も焦点化できたことも効果的だったと考えられる。

【手立て2】 共有化

- MetaMoji Classroom上に全員が共通で操作することができるワークシートを準備し、係ごとに色分けした付箋に自分の意見を打ち込んで貼り付けたり、付箋を移動させてグルーピングしたりすることで、作業の効率化も図ることができ、気軽に記入したり訂正したりすることができたことが、全員で温度差なく情報を共有することに役立ったと考えられる。
- 調べ学習の途中経過として、家族へのインタビュー動画や音声を共有することができたことも、長期間をかけて調べ学習を進める上で大いに役立ったと考えられる。



【手立て3】 視覚化

- 本単元だけでなく、他教科や行事など、様々な活動の中でタブレットを活用してきた。撮影した写真を加工してコマ落としアニメーションを作ったり、撮影した動画を編集アプリで加工してコマーシャルを作ったりすることで、タブレットを活用する力を育んだ。その上で調べ学習で得た知識を、多くの方々に伝える方法として当然の選択肢にすることができた。ワープロソフト、プレゼンテーションソフト、動画編集アプリケーションなど、様々なものを自分の道具として使えるようにすることが、視覚化を容易にするうえで大いに役立ったと考えられる。
- 「動画の編集ができるようになったから使いたい。」という思いが強すぎて、その目的を見失い、動画を編集することが目的にすり替わってしまう場面も多く見られるため、機器はあくまでも目的を達成するために使える道具であり、道具を使うことを目的としないような指導が必要であると考えられる。

(3) 研究協議会の様子



(指導助言：佐藤 倫子 指導主事)



(指導助言：宗形 潤子 様)

### Ⅲ 成果と課題について

#### 1 成果

- 今年度は、情報モラル研究校の指定を受け、学級活動・道徳科・総合的な学習の時間における各学年の授業実践を行った。全体計画に掲げた通り、①日常モラルを育てるためには、学級活動や道徳科、さらには学級懇談会を活用した保護者への啓発も欠かすことができない。②仕組みを理解させるから③日常モラルと仕組みを組み合わせさせて考えさせる段階まで指導を進めていくと、道徳科や総合的な学習の時間を軸に、国語科・社会科・家庭科など、各教科等との横断的な指導が大切になる。

今年度の授業実践を進めていく中で、学年を縦断した指導について考えたり、各教科等を横断した指導について考えたりすることができたことは、本研究の大きな成果であるといえるだろう。

- 5・6学年の実践においては、平田小学校の150年の歴史を紐解くために実施した保護者や祖父母へのインタビューや、児童の祖父で現役のYouTuberをゲストティーチャーに招いた授業など、保護者や地域とのかかわりが不可欠だった。

児童の情報モラルや情報リテラシーを育むために、学校と保護者、地域が同じ視点に立って学び考えることにとどまらず、地元で生まれ育った方々の知恵や記憶を学びに生かすことや、実際に情報を社会に発信しているからこそ知っている利便性と危機管理について生の声を聞いたことは、児童にとっても次年度以降の平田小学校の教育活動においても大きな成果だったといえるだろう。

#### 2 課題

- 6年間を見通して、小学校を卒業するまでに必要な情報モラルと情報リテラシーを身に付けさせるためには、教育計画を立案する段階から工夫が必要である。

また、ICT機器の使用にばかり気を取られると、機器が目的達成の道具としてではなく、機器を使うことが目的とすり替わってしまう危険性もあり、十分な教材研究が必要となる。そのためには、まず、教員一人一人が機器の特性を十分に把握し、困難なく使える技術が必要となってくるため、校内外を問わず、ICTや情報モラル・情報リテラシーに関する研修がさらに必要不可欠になるだろう。

- 「ゲームやテレビ、インターネット、スマートフォン等は家のルールを守って行っているか」という具体的な問いについて児童、保護者、教職員、それぞれの立場から見ると、互いの認識にずれがあることが分かる。

この設問に対する児童の回答は、4点満点中3.5であり、自己評価は高いことが分かる。しかし、同じ質問に対する保護者の回答は2.6であり、決して高い評価とは言えない。この結果に対して、医療創生大学教授中尾剛先生は、「**何をもって守れていると判断するか、その判断基準が具体的ではないことが、意識のずれが生じる大きな要因**」と語っている。児童は、「宿題や自主学習を終えた後の自由時間内にゲームをし、決められた就寝時刻には床に就いている」ことから、約束は守れていると判断しているが、保護者は「使用時間を1時間以内に収めたいが、自由時間の全てを費やしてしまうので、長過ぎる」と感じている。このことから、家庭内で使用のルールを決める際に具体的な数値目標が必要であることがうかがえる。今後、さらに意図的・計画的に地域（家庭）と連携した情報モラルに関する授業を行うとともに、保護者への情報モラルの啓発を行っていく必要があることを再認識した。